

家庭生活における「一家団欒」の社会史的考察(3)

—土雛人形を中心とした庶民家庭における三月節句の教育的意義—

佐野 茂

1 課題および学問的視座

親の愛情は様々なかたちで子どもに表出される¹⁾。日常生活のなかでの明白な言語、非言語的態度もあれば、非日常的な人生儀礼等、その行事そのものが親の子に対する愛情を意味するものもある。また神仏への祈願に介在する「お守り」なども象徴的な親の愛情表現と理解できる。今日のように経済的豊かさ、また心的態度を自由に表現することが容易な時代では、親子の親密性を表現する場は随所にあり、庶民家庭でさえ、きわめて日常的な行為となっている。

しかし、戦後復興期以前の日本社会のそれは今日と比較すると、随分違った形態をとっていたのではないだろうか。もちろん親の愛情を計数的に測定できるものではないが、物品贈与を伴う目に見える形での愛情表現は家庭の経済的基盤とは無関係ではないことから、多くの庶民家庭においては、そのような場は今日とくらべれば当然少なかったと考えられる。

ただ、だからといって当時の親子の愛情関係が今日と比較して密度の低いものであったかといえ、決して一律には語れないだろう。例えば家庭生活における「団欒」といったものは、目にみえる、より日常的な愛情表現の一形態と考えられるが、当時の様子は今日のものと比較すると頻度は乏しく、外的内容は劣ったものであった。しかし盆、正月、祭礼時等のふしぶしの年中行事の緊密さについては、むしろ現代家庭よりも強いものがあったとの述懐を数多く聞く。²⁾ とりわけ、三月節句については年長者からの聞き書き調査などで必ず語られる子どもにとって最も楽しい行事の一つであった。

そしてこれらの場合、例えば三月節句であれば雛人形、また五月節句であれば幟、破魔弓といった縁起物・玩具が添えられることにより、その行事が大人の子どもへの愛情表現の場として強化され、その場をつうじてより好ましい親子関係、そして地域の大人と子どもの関係が築かれていったていったのではあるまいか。とりわけ、日常的にそういった場・時間をもつことが困難な時代であればあるほど、それらの行事、またそれらを飾るお守り、縁起物等のもつ人格形成上の意味はより強いものがあつたと仮説する。

小論の課題は戦後復興期以前の日本の庶民家庭が、³⁾ その日常的過程で、どのように子供たちの人格形成にかかわっているのかを考証するものである。今回はその方法として、「土雛人形」を手がかりに、⁴⁾ これらの行事が当時の親子関係、また地域の大人と子どもにどのように関わりあっていたかを考証したい。

ひな祭りと呼ばれる三月節句は、祖父母・親・親戚縁者・地域成人が雛人形を子ども(女兒)に贈り子ども達の幸福、息災を願う行事で近世以降日本の庶民家庭にも定着した大人の子どもに対する愛情表現の象徴的な場と理解できる。ただこの場合、貴族、上級武士、豪商、豪農階層は豪華絢爛な高価な雛人形があてがわれたが、庶民層では粗野な「土雛」「紙雛」が中心であった。また買い与える大人においても、愛情表現として強い意識をもって購入した場合もあれば、形式的な慣例として買い与えた場合もあつたであろう。しかし、このような慣例は親と子、大人と子どもが面とむかって向き合う場所、時間が希薄であつた当時においては、やはり子どもの人間形成には重大なインパクトを与えた場・時であつたのではなからうか。

三月節句の意義、理念についてはあらためて述べる迄もなく民俗学の領域から数多くの報告がなされているところであるが、雛祭り、雛人形の持つより具体的な人格形成上の意味については詳細な言及がされることは少ない。そこでの記述・報告は「子どもの幸福を願って」という一括りで概説され、例えば教育学的な関心である、土雛がどのような親・大人の心持ち(心性)で購入・贈答され、また子ども達自身がどのような気持ちでそれを手にした等の、土雛を中心とした三月節句の人格形成プロセスについての報告はされていない。

以上のようなことから、小論では大正もしくは明治の後期に出生された年長者から庶民階層で購入、流布されたといわれる「土雛人形」の思い出を手

掛かりとして、土雛に対する親・大人の思い、願いを考証するとともに、三月節句のもつ人格形成上の影響、またそのプロセスについて考察したい。

2 方法

(1) 質問事項および対象者の選定

このように小論は「土雛」を手がかりとして庶民の三月節句、家庭生活を史的に考証することをねらいとするものであるが、質問事項の中心的課題は幼少時、土雛を中心とした三月節句の思い出や、また成人後、近隣の家庭に贈答した時の体験、心情を語ってもらうことである(表1参照)。情報提供者の選定は、福祉協議会を通じて各地区老人会の名簿を入手し、原則、老人会会長(または婦人部長)から、その地域に幼少時より住まいして、記憶の確かな年長者(原則七十才以上)を紹介してもらう方法をとった。但し、場合によってはその地域に入って偶然出会った古老から地域の様子を聞き、適当な年長者を紹介してもらうケースも想定した。いずれにせよ面接時に情報提供者に心的防衛を生じない環境を第一とした。

表1 主な面接内容

- | | |
|---|-------------------------------|
| 1 | 家族の属性、家族関係(幼少時) |
| 2 | 団欒を中心とした家庭生活全般(幼少時、家庭を持った後) |
| 3 | 三月節句についての全般的な思いで(幼少時、家庭を持った後) |
| 4 | 土雛人形の三月節句での意味(今からふりかえて思うこと) |
| 5 | その他の節句、正月、祭事の思いで(幼少時) |

(2) 調査場所、時期、人数

調査場所は宮崎県佐土原町、西都市近郊で実施した。この地域を選定した理由は①廉価な土雛人形が、比較的狭い範囲で、かつ高密度で流通していたと想定できる地域、②土雛人形の史的意味を確認するうえで現在もその土雛人形が製造されている地域ということ、である。⁹⁾九州地方においては帖佐人形、古賀人形等も佐土原人形同様、伝統的な人形制作地域として考えられたが、両地とも暫らくの間、恒常的、職能的人形製作者が途切れており、今回の調査地域からは外した。

具体的な調査場所は以下のとおりである。

西都市 都於郡岩爪 都於郡荒武 三財加勢 三納 檜野 穂北
 黒生野
 佐土原町 佐賀利 新木 年居 田島 下浦下
 調査時期は1995年5月から1997年6月
 面談者は女性22名

(3) 土雛人形の庶民性

「庶民家庭の三月節句」という課題から土雛人形が庶民の人形であったことを考証しておく必要がある。佐土原人形のルーツと考えられている伏見人形は廉価な庶民の人形であったが、⁶⁾ 今一度、当時の佐土原人形の価格と物価を比較し、どの程度の価値を持っていたのか確認したい。土雛人形の価格は例えば特性大正7年発行の「郷土趣味」第1号のなかで諸国おもちゃ目録として佐土原人形が紹介されており、⁷⁾ そこでは各種十銭以上とある。ちなみに同地方(日向)の郷土玩具の鶉人形二十銭とある。この価格と、表2の当時の諸物価を示したものを比べた場合、例えば、草履七銭、下駄二十五銭とあり、これと比較しても土雛人形が庶民の手に届く代物であったことは予想できる。

表2 大正時代諸物価

いなり寿司1個	大正七年	一銭
草履一足	大正十二年	七銭
下駄一足	大正十二年	二十五銭
鎌 一丁	大正十二年	三十二銭
安産腹帯	大正四年	三十五銭
小学校教員給料	大正七年	一二円～二〇円
内裏雛(衣装着中級～最高級品)	大正五年	一円七〇銭～五十円

『日本生活図引5』『新値段の風俗史』を参照して作成

3 面接調査の結果

以下、面接調査での年長者からの報告を記すが、紙幅の都合上、同内容のものは筆者の判断で任意に割愛し、要約したものを標準的な言語に言い換え、節句と子どもの人間形成に関係する内容のみを報告する。

- (1) 団樂を中心とした家庭生活全般について
 - 1 団樂は田植えの後の休日か節句の時ぐらいで、一年の内数える程のことだった。
 - 2 節句時はめったに仕事を休まない父母も仕事を休んだ。普段は粟・ヒエご飯が中心だが、お寿司、赤飯がでた。
 - 3 節句時にはご馳走がでるのでいわゆる家族団樂を感じた。
 - 4 三世代家族から二世代家族に変わっていき、節句時の団樂の雰囲気も減っていった。

- (2) 三月節句について
 - 1 初節句は長男、長女だけのものではない。それぞれの子どもにも土雛人形等が贈られた。
 - 2 雛の絵が書かれた掛け軸的なもの⁸⁾を親戚・近隣の人がもってきて祝った。
 - 3 節句は五女だったため姉妹のお下がりの人形だった。
 - 4 初節句当日は反物とか焼酎、祝い金を持っていき、それまでに人形等を贈っていた。
 - 5 長女ができると「あそこは羽子板だべ」といって近隣の人が節句時(正月、三月)に祝った。
 - 6 桃の節句が近づくと土雛やその他の人形を飾ったが、三月三日で雛飾りは片づけるようにした。というのはあまり遅くまでならべておくとお嫁の行く先がなくなると言われたので。
 - 7 初孫に対して祖父母が人形をはずんだ。父母は貧しく食べるだけで精一杯だったと思う。
 - 8 三月三日までに近所の人が祝いを持ってきてくれた。そして当日は近隣の人(祝ってくれた人)をもてなす。
 - 9 赤の布を敷き自家製の雛板を作り祝った。盛大に祝ったのは長男、長女だけで二番目、三番目の初節句は簡素化された。
 - 10 長男の初節句の時は近隣の人まで盛大に祝ってくれた。
 - 11 戦前は雛の絵を書いた掛け軸をもらった。戦後は少し経済がよくなつてか土雛を近隣、近所から贈られ、肉親が与えるということにはなかった。むしろ、家族は新しい着物を与えた。

- 12 直接家族からは何ももらわなかった。
- 13 祝いを持ってきた人には料理でもてなした。
- 14 節句は子どもにとって一番楽しい時だった。お膳がでて、イワシ寿司、煮豆、吸い物、山芋などがでた。
- 15 末っ子は姉妹のお古の人形であった。
- 16 土雛が与えられたらいい方で紙製の時もあり近隣から贈られない時は親が買い与えた。
- 17 親戚一党が集まり掛け軸をおくった。但し、次女以降は父親が新しい掛け軸を買い与えた。節句時は部屋一杯に人形、掛け軸を飾ったものだ。昔の方がにぎやかだった。
- 18 母親になってからは時代も時代であったので(戦争)新しいもの買ってやれず、古いものを探し出してにぎやかに飾った記憶がある。
- 19 節句は長男、長女だけであった。親戚一党が集まり、土雛とともに反物なんかも贈った。
- 20 三月になれば掛け軸などを飾りはじめ、子どもを喜ばした。子どもも本当に楽しみにしていた。
- 21 とくに初節句は子どもの祝いだけではなく親にも着物がついてきた。
- 22 子どもの頃節句時に買ってもらった土雛人形や市松人形を背負って遊ぶのが楽しみだった。
- 23 残念ながら新しい節句人形はもらったことがなかった。近所の人からももらったお下がりであったと思う。
- 24 身内が直接人形を子どもに与えた記憶はない。反物とご馳走は与えたが。
- 25 母親になってからご近所に初節句の時は人形と祝儀(お金)をもっていった。

(3) 人間形成全般

- 1 次男・次女以下はあまり、近隣・親戚から目立って祝ってもらおうということはなかったが何番目の子どもであれ、親の愛情は変わらなかったと思う。
- 2 代々の掛け軸(土雛を書いたもの)を祖父母より節句時に飾るのは何ともいえない家族のありがたみというか、そういう嬉しさを感じ

た。

- 3 戦争が絡んで実の子には十分できなかったので、その分孫にやってやりたい。また私自身も親から直接というよりも祖父母や近所の人から何かやってもらったという覚えが強い。
- 4 親の愛情を伝えたいということでご馳走などを用意して近隣の人もてなした。
- 5 節句時はゆっくりと子どものことを考えることのできる日だった。普段は忙しくてなかなか子どもを思うゆとりがなかった。
- 6 ご近所のものが子ども達を祝うという感じではないかと思う。
- 7 親になってから本当に節句の用意は大変だったが、四、五軒集まって餅をつき親戚も集まり賑やかにやったことは子どもにとっては良い経験になっていることだと思う。
- 8 親からももらった人形は絶対に捨ててはといけないと、自分の子どもがいうぐらい、それ（人形）は強い絆のあるものだった。

(4) その他

- 1 鬼子母神（佐土原）には年一度（大祭日）必ず子どもをおんぶして連れていき息災を願った。節句とともに大事な行事。
- 2 終戦の年は自分の子どもに何もできなくて、自分の着物をつぶして子どもに与えたが、何か、新しいものを与えることができなかったことが可哀想であったと今でも思い出す。
- 3 自分も嬉しかった記憶が残っていたから子どもにも同じ思いをさせたいという気持ちがあるのだろう。そういったことを繰り返すことが親子の証となっていくのだろう。

4 考察

(1) 団欒と三月節句

家庭生活全般と団欒を中心とした調査で、多くの年長者が節句と団欒の強い関連を述懐していたように、今回の調査においても団欒の思いでとして、その象徴的な場、時として三月節句があげられた。親、祖父母、子ども、そして親戚、近隣集団までが楽しく交流し、その場をより華やかに、にぎにぎしくする道具として土雛人形や掛け軸が飾られ、またご馳走がそえられた。

団欒といった場合、今日のイメージとしては家族間のしかもどちらかといえ、二世代間の楽しい交流で（三世代家族の減少による）、そこに近隣集団が交わるといったことは現代家庭では極めて稀なことである。その意味において戦前の家族の団欒は地域との交流までを含んでいる場合もあり、家族と地域との緊密性の強さがうかがえる。

(2) 三月節句と人間形成

今回の調査を通じて異口同音に語られたことは、節句という年中行事の一つが、単に家族、親族だけで子どもを祝福したのではなく、地域の人々がおおいに関わり、その行事を盛り上げていたことである。その場合の地域住民と家庭を結ぶものが土雛人形等の縁起物人形であった。一方、今日の家庭は、当時と比較すると、地域住民とのかかわりは簡素化されて、土雛等は祖父母や直接父母から贈られることが大半との報告を数多くうけた。調査地域以外の現代家庭でも、とりわけ都市部においてはこのことがあてはまることは述べるまでもない。

このように三月節句の人間形成の意義を考えた場合、当時の特徴として地域住民のかかわり、人間形成の影響力が浮き彫りになる。口やかましい存在ではあったが、地域の子どもを祝福し、子どもに心をかける地域住民の存在は大きかった。調査前の仮説として、地域のかかわりの強さは民俗学的な知見より予想はできたが、父母の直接的なかわりも今日以上に強いものがあったのではないかという予見は、年長者からの報告を聞く限りにおいては、少し違ったものであった。もちろん父母のかかわり、子どもへの思いが希薄であったというのではなく、自分の子どもを祝福してくれる近隣集団の饗応に精一杯だったようで、いわゆる家族水入らずの団欒というものではなかったようだ。したがって、子ども時代も、親になってからも地域、祖父母とのかかわり、思いの方が強かったようで、三月節句において父母とのかかわり、思いでを熱心に述べられた報告者は少なかった。

このことから、家族団欒の象徴的な場としての三月節句の人間形成機能については、「家族・親」の近隣への気遣いを前提に、「地域」の影響を強く受けていたものであったということが推察できる。

(3) 今後の課題

過去の調査からの報告では年中行事という場での「団欒」の印象は鮮明で、数少ない親の子に対する愛情表現の場であったことは間違いないが、三

月節句については上述したように極めて、地域住民が参加しての団欒であり人間形成機能であった。その意味で家族水入らずの交流の述懐が十分に聞き取ることができず、今後の検討事項として残された。

そこで次回調査では、「正月」「盆」「祭礼」行事等に焦点をあて家族内交流での人間形成機能を考証する必要がある。

もう一点は「土雛人形」が「一家団欒」を盛り上げる道具的な機能としてどういう位置づけにあるかという問題である。現代家庭において「一家団欒」を醸成する道具的装置（外的条件）として「ご馳走」「テレビ」「旅行」といったものがあげられたが、これらはあくまでも団欒を盛り上げるための外的な二次的道具にすぎない。しかし年中行事などで添えられる人形、幟、羽子板、凧などは単なる道具ではなく、それそのものに大人の愛情が注ぎ込まれた、大人と子どもの愛情関係を意味する道具である。

その意味で小論では、「土雛人形」が身内から贈られることが少なかったということもあるが、土雛人形そのものに対する親の「思い」についての考証が十分でなかった。これらの道具の意味を考証することにより、当時の家庭生活全般の人間形成機能がより明白になるのではないかと推察する。このことから今後の課題として、一般的に家族内から贈られたといわれている「凧」「羽子板」等に焦点をあて再考したい。

参考文献

- 青山幹雄『佐土原土人形の世界』鉾脈社、1994年。
宇野千代・瀬戸内晴美他著『日本の工芸5人形』淡交新社、昭和41年。
江馬努『四季の行事』中央公論社、昭和63年。
小田省三「佐土原土人形考第5輯」発行者小田省三（非売品）、昭和51年。
折口信夫『折口信夫全集第3巻、「雛祭りのお話」』中央公論社、47-54頁、昭和41年。
斎藤良輔『郷土玩具辞典』東京堂出版、昭和56年。
週刊朝日編『新値段の風俗史』朝日新聞社、平成二年。
週刊朝日編『値段史年表』朝日新聞社、昭和63年。
大藤ゆき『児やらい（民俗民芸双書26）』岩崎美術社、1985年。
日本人形研究会編『人形読本』雄山閣、昭和8年。
『日本民俗辞典』弘文堂、昭和58年。
『日本生活図引3あきなう』弘文社、129頁、1988年。
『民俗の辞典』岩崎美術社、1975年。
柳田国男『定本柳田国男集第13巻』筑摩書房、昭和56年。

引用・注記

- 1) この場合あえて「愛情」を概念規定するならば、小論ではE. バーン（白井幸子『死と闘う人々に学ぶ、医学書院、1981』参照）が示すところの肯定的、無条件ストローク（愛撫）と考える。言語、肉体的、心理的方法による愛撫、ほほえみ、承認、語りかけ等。
- 2) 佐野茂、「明治期後半、大正、昭和初期の庶民階層における家庭の教育に関する一考察」『梅光女学院大学論集』26号、73-74頁 1993年。
- 3) この場合、戦争の惨禍が消え、高度成長時代の萌芽期である昭和30年以前になるが戦争中、戦後暫くは特殊な時代区分と考えるので、実際は昭和初期、大正、明治後期を指す。
- 4) 土人形の主流は三月、五月の節句人形が中心で、江戸時代に入り生活が安定し、各地域で瓦を焼きはじめたことも、土人形制作と関係しているといわれ、加えて二百六十年の平安が庶民階層においても三月節句に雛人形を贈答する習慣を浸透させたものと考えられている。三月節句は雛人形が中心であるがその他縁起物人形多く作られ、子供の健康安全を祈念して贈られた。当時の有名な生産地は江戸の今戸、仙台の堤、秋田の八橋、山形の相良、九州では福岡の博多、長崎の古賀、宮崎の佐土原、鹿児島島の帖佐で、東の堤、西の古賀を伏見とあわせ日本の三大土人形と呼んでいた。
- 5) ただ、帖佐人形は昭和四〇年に保存会が発足し現在は再び製作がなされている。また古賀人形も伝統工芸品として十八代目小川氏が製作をつづけている。
- 6) 伏見人形、江戸初期頃、伏見近郊は埴輪作りに縁深い土師部一族が居住していたところで、そこでは良質の粘土にも恵まれ、街道筋に面していたことから、廉価な土産物、縁起物としての土人形制作がはじまったとされている。最盛期幕末には5.0数軒の製作者がいたとされている。種類も豊富で三〇〇〇点に及んだ。火難よけの布袋、盗難よけの西行人形などが人気があり、また、伏見人形はこわれてもその土は伏見に戻るといふ言い伝えが信じられたため、壊れても、土人形を安心して買い求めることができたとされている。
- 7) 大正7年～14年にかけて田中俊次の編集により京都で刊行された雑誌で、諸国の玩具、縁起物等を紹介した。
- 8) 今回の調査で語られたものは紙製で幅約60cm高さ160cmぐらいの代物で雛人形を图示しただけの廉価なもの。

追記

今回の調査は以下の方々と佐土原、西都市近郊在住の年長者の暖かい協力のもとに実施できましたことを付記いたします。

佐土原町文化財審議委員 青山幹雄氏
佐土原人形五代目窯元 岩切和子氏
佐土原城址歴史資料館 鶴松館 杉尾壽澄氏